

大震災の救助現場で(1995年3月号掲載・伊関 薫)



「おじさん、早く出してっ！」

比較的、元気そうな声で女の子が呼んでいます。

地震発生後、私が出動した3件目の生き埋めの現場は、母親と姉妹3人の計4人が倒壊した建物内に取り残されました。

要救助者に不安を持たせてはいけないと思い、こちらも努めて明るく、「すぐに出れるから、もう少しだけ辛抱してな」と返事するが、倒壊建物は鉄筋コンクリート造の2階建、1階部分は押し潰され1メートルぐらいになっており、要救助者まではコンクリート壁、押し潰された家具等が障害になって救出が容易で無いことはすぐに想像がついた。

同僚二人と相談し、1階玄関付近から屋内への進入を試みるが内部は更に狭く、高さが50センチ程になり、木片、ガラス片、衣類、本等が進入を阻んでいた。

ほふくの姿勢で進みながら、手当たり次第に障害物を除去し、5～6メートル進入したところで二段ベッドが潰れ姉妹2人が重なって天井との間に挟まって易るのを確認。布団、毛布を引き抜き、僅かに間隔を拡げ約2時間後に救出に成功しました。

その後、同場所から母親と末妹の救出を試みましたが、障害物の除去が困難なため救助方法を変更、

2階床面を削岩機で破壊、鉄筋をボルトクリッパーで切断し開口部を作り、家屋内から引き出すことはできたが、活動を始めてから約7時間が経過、すでに息を引き取られていた。

活動中、何度かの余震の恐怖感に襲われながらも、自分自身を叱咤激励し、救出をやり遂げることはできましたが、妻と娘を亡くされたご主人の心情を考えると、決して満足できる結果ではない。

今回の震災で、私自身10数名の救出に立ち会ったが、生存は僅か4名。

大規模災害の脅威と人間の非力を思い知らされたが、救助活動の限界を感じることはない。

「もっと、多くの人命を救助(生存のまま)したかった」「きっと、救助するぞ！」の気持ちを持ち続け、今後も救助活動に邁進することを決意した。